

基調講演 「いのちとところ」

講師 山田 卓三 氏

(兵庫県立南但馬自然学校長)

体験学習とか自然体験など最近では「体験」という言葉が良く使われている。「経験」という言葉と同意語に使われているが「体験」と「経験」の区別が必要だ。「体験」とは、体を使った「経験」のこと。体験は断片的でも体験だが、経験といった場合にはそれに知の裏付けや流れをもった体系化が必要だ。田植えをしてそれを収穫して食べたとしてもそれは稲作経験があるとは言えない。苗床づくりや田起こし、代掻き、田植え、水の管理などをして体験と共にそれに関連した知を伝えることが出来なければそれは経験とは言えない。「乳幼児期の原体験は神経回路の形成や、そのネットワーク化として有効だが、幼児期以降の体験は点から線に、さらに二次元や三次元に構築を意図した体験の経験化が望まれる。

「体験」とは触・嗅・味および視・聴の五感であるものだが、視・聴の感覚と触・嗅・味の感覚はその成立に違いがある。頭を動かさなくても聴覚は 360 度の情報が、視覚も 180 度の情報が入ってくるので大脳で取捨選択しなくてはならない。このため幻聴や錯覚など幻覚現象がみられる。視聴は高級な感覚だが触・嗅・味は最も基本的な感覚で、これらがなくなると、生きていくことが出来なくなる。この視点では見合い結婚ではなく、ふれあい結婚がよいとなる。

「いのちとところ」を考える場合、植物と動物そして人間とは区別して考える必要がある。植物には個性がなく花の付いている枝を採ってもそれは死につながらない。ところが多くの動物は個性があり身体の一部を傷つけることで死につながっている。さらに人間は特有の心をもって先を予測する能力をもっている。動物とはまた違った存在だ。

人間は動物分類学的にはヒトと表記する。「人間」という表記は中国のもので日本古来の大和言葉は「ひと」(人)で喜怒哀楽の情感を有した存在だ。したがって、オオカミに育てられても「ヒト」だが、人(ひと)とは言えない。人は人間性豊かな人(親)に育てられてはじめて「ヒト」から「人」になる。「ヒト」ではなく人間性を持った社会人となるためには、母親という絶対的に信頼できる存在が必要だ。感性豊かな人に育てられて初めて感性豊かな人になれる。感性は教えるものではなくその環境をつくってやることで自ら学ぶもの。



感性には体験と同様に知の裏付けが必要だ。彼岸花について、俳句を二つ。「裸にて 炎と化すや 曼珠沙華」(中勘助)「前略で いきなり咲きし 彼岸花」(神田衿子)。この俳句を理解するためには、まず、彼岸花(ヒガンバナ)と曼珠沙華(マンジュシャゲ)が同じ植物であること、そして花はお彼岸の頃に花茎だけをいきなり伸ばし数日で開花し開花時には葉は無く花が済んでから葉を出して茂るその生態を知らなくてはならない。ヒガンバナは古くは救荒植物として中国から移入されたものと思われるが、田の畦やお墓などに植えられ繁殖し、古来から毒があるためか悪いイメージが強く、舌しびれ、ゆうれい花、火事花、などと 300 余の良くない方言名で呼ばれている。唯一「はみずはなみず」(葉見ず花見ず)がある。この植物

をこよなく愛した中勘助の詩に、「はみず はなみず 秋の野に ぽつんと咲いた 曼珠沙華 からくれないに 燃えながら 葉のなかりこそ さびしけれ」がある。これらの俳句や詩を理解するためには、まさに「体験」の「経験」化が必要だ。

このシンポジウムのテーマに「風をおこそう」とある。風は空気の流れで、そのものは見ることは出来ないが風があたると肌で感じたり、物を揺さぶることでその存在を知ることができる。空気の流れや雲について、旧制諏訪中学の先輩で気象台長であった藤原咲平博士がユニークなことを言っている。気象台でアマガエルを飼育して天気予報をしたことでも知られている。アマガエルが飼育ケースの下方の水辺にいるときは天気良くなり、ケースの上方の枝先に登って居ると湿度が高く雨になるので予報官の予想よりよく当たるといふ。雲の移動について、「雲は、雲が動いているのではなく、雲を作る環境が移動している。だからその環境を作れば雲が発生する」

この考えは、ある意味では科学的だが、ある意味では哲学的だ。一定の環境が出来て、そこから雲が出来るのか、この辺になると、哲学的な観点も加わってくる。

文芸作品の中にも多くの科学的視点がみられる。鴨長明の方丈記の最初に、「ゆく川のながれは絶えずして、しかも元の水にあらず、よどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまることなし・・・」と延々と流れる川の様子を表現している。また、文中に地震や津波についての記載もあり、今回の東日本の地震と津波の大震災の映像をみてこの記述を読み返してみるとこの震災の映像と重なりいかに科学的な客観性のある見方でリアルであるか感心してしまう。

命と心の捉え方について。脳死や臓器移植の問題もあるが、命が脳にあるという風に考えると、命と心が重なってしまう。そのため、脳が

停止した人は、生きていても心がなくなる、だから死んだ、とも言える。

科学は、このように条件と定義の世界だ。教育で簡単に教え込むなど無理なことだ。日頃から学ばせなければならない。例えば、命の大切さを教えるには死を、光には影を、安全には危険の「体験と知」が必要だ。しかし、学習体験としてこの影の部分には配慮が必要だ。いのちの教育には死の体験が必要だと、生きたニワトリを絞め殺し喉から血を流すといった学習は却って逆効果になることがあるのも知る必要がある。動物は死ぬから飼育させないというのではなく、大切に飼育してきた動物の死をみつめることは大切だ。安全のための危険体験も同様だ。包丁やナイフなど危険だからと全く使わせないのではなく小さな危険の体験により大きな危険を避けることが出来るリスクの学習も大切だ。

自由学園のように豚を飼って、それを食べるか食べないか子どもたちで決めて行動する、という事例もある。子どもたちは、涙を流して命の大切さを知ることが出来る。人間の死も家でなく病院での死亡が多くなった。現在、祖父母の家で亡くなる状況を体験する機会が無くなり、病床でいつもの強い父親が涙を流すのも見て命の大切さを知ることが無くなってしまった。ただ、命の教育として、死を全面に出すのではなく、親たちはそういった環境を作ってそっと見守ることも大切だ。

例えば、農業体験において、キャベツを食べようとする、青虫を殺さなくてはならない。蝶を育てようするとキャベツが犠牲になる。命の観点で相反することになるが、それが子どもたちには大切な体験だ。

体験と同時に知の学習もさせたいものである。例えば春先の若葉や秋の紅葉を観ながら色の話をするのも良い。「いろいろの色はあれども色々の色集まれば色はなくなる」絵の具の色は混ぜると黒くなり、光の場合は三原色を混ぜ

ると白くなる。また色の漢字に直接「い」がつく色は、白い、黒い、青い、赤いと四つある。マムシは本当の虫、真虫だが、「ま」のつく色も「まっ黒」「まっ白」「まっ青」「まっ赤」と四つある。さらに、白々、黒々、青々、赤々など色を二つ重ねて表現するものも四色に限られる。このように古来の色の呼び名の由来は暗いがくろ（黒）が、明るいがあか（赤）、空や葉の緑のような色をあお（青）、顕著な目立つ「しるし」がしろ（白）で表現していたことなど古からの和語はあいまいであったことを知るのも良い。万葉集で「もみじする」とは色が黄色になることも紅く変わることも共に表現していた。また、蛙の手に似た葉がカエデで、これが美しく紅葉するのでモミジと言われるようになったこと、木の子がキノコ、稲の子がイナゴ、などなど、こういった言葉遊びをする中で、体験と知が身に付く。

人の心で大切なのは花鳥風月などを愛でる感性、時間的空間的な先を予測すること、抽象的な事象を表す言葉や文字を有していることなどは人間だけであることの再認識が必要である。

動物で雌雄の行動が明確なように人間も個性としての性を差別でなく理解しあいたいものだ。女性は相手を傷つけないよう行動したり、ものを言う。例えば、自分がケーキを食べたい時に、「あなたケーキ食べたくない？」と問いかける。このように、否定で聴いてきたら、男性はこれに同調して肯定で答えてやらなければ女性は気分を害する。逆に「お腹すいている？」と肯定で問われたら、「空いていない」と否定の言葉を望んでいることが多い。また、女性は買い物をするとき、既に欲しい方が決まっているのに、「どっちがいいかしら」と男性に聞く、この場合、持っている方に重心が移動するので、その側の足のつま先が出る。これを確かめて、その方を薦めるのが良い。男性は何かしている時の会話は記憶をつかさどる脳の

海馬を通らないので記憶していない。男性はバラを 100 本あげるなんて無駄と思うが、女性は男性が無駄で惜しいと書いていてもその気持ちの評価する。などなど……。男女の脳の違いは存在する。

老子の言葉に人・地・天・道・自然（じねん）という言葉がある。これは「人は地に法り、地は天に法り、天は道に法り、道は自然（じねん）に法る」というもので倫理、道徳、法律より上位に「自ずから然り」の「じねん」を位置づけている。森鷗外の小説「高瀬舟」で、罪人を乗せて運ぶこの舟に平穏な姿で乗っている罪人を運ぶ役人である同心が不思議に思い、聴いてみると、自殺しかけて失敗し、苦しんでいる弟を殺した。今流に言えば安楽死させた罪だが、本人は、法や倫理道徳に反してもこの”じねん”に則った平穏な心境であることを知る。この視点で 交尾後相手の雄を食べるカマキリの行為やカバキコマチグモが自分の体を自分の子ども達に食べさせる”共食い”は結果的には確実に栄養を子孫に受け渡していると考えれば、必ずしもその行為は「残酷」ではない。

「体験」の「経験」化も意図的に時間をかけてさせたいものである。最初はてんでばらばらであっても多様な体験は時間をかけると線になり平面になり最終的には立体となって生きて働く力になる。「経験」化した「体験」と「知」は人に伝えることもできる。

自然は多様だが、ある程度は一般化が可能である。しかし、その境界線はなく連続している。このように自然は多様性、一般性、連続性を有している。「自然体験」とは言うが、「自然経験」という言葉はない。なぜなら、自然というものは総てを体系化することのできない無限の宇宙的存在であるからだ。しかし、子どもたちに教える時は、自然というものを自分なりに定義して、教えてあげてほしい。

最後に私の好きなことばは「野に遊び 自然に触れ 自然に学ぶ」である。

パネルディスカッション

テーマ「子どもの成長に必要なこと」

パネリスト

伊藤雅恵氏（OAA 学生ボランティア）

小南廣之氏（淡路島冒険の森主宰）

丹後政俊氏（県立篠山東雲高等学校長）

西森由美子氏（NPO ウイズ 代表理事）

コーディネーター

速水順一郎氏（兵庫県青少年団体連絡協議
会長・県子ども会連合会常務理事）

1 普段、どのような活動をしているか？

伊藤：学生ボランティアとして活動している。団体は4年制大学に通う学生のみで、現在11名で活動している。活動内容としては、毎週土曜日14時からのミーティングと、主に年2回の小学生対象キャンプの企画運営に携わっている。

小南：「淡路島冒険の森」「森番」「こみじい」こと小南廣之です。9月23日で冒険の森が誕生してから9年目を迎えた。当初は月1回の開催だったが、2004年度から「子どもの居場所事業」を受け入れ月2回に。2006年度から「子どもの冒険ひろば」事業が始まり、月4回以上の開催を現在も続けている。

自然と触れ合い、冒険心や挑戦心がわくように、森には竹の展望台、空中回廊、滑り台や、ハンモックやブランコなど手作りの遊具、再生した土壁の民家には、囲炉裏、土間、そして牛小屋は絵本の部屋と屋根裏部屋に、かまどがあった場所(かまや)に、パンやピザが焼ける石窯も作った。

遊具だけでなく、自由な遊びが広がるように、木切れや流木、どんぐりや貝殻など、自然素材

を使って工作なども出来るようにしている。

作るきっかけとなったのは、①子どもを取り巻く環境が悪くなったこと。とりわけ、人とのふれあいや自然体験の喪失。②素晴らしい力をもって生まれてきた子どもがその力に気づいていない(エンパワメント)という考えに出会ったこと。③プレーパークの存在を知ったこと。④探検家二名良日氏との出会い。⑤同じ志の仲間がいたこと。

目指しているのは、人と自然にふれあえるところ(子どもも大人も自分らしくいられる場)を作ること。そのために、①勇気を出して挑戦し、遊びの中で自信がふくらみ、自分の野生の力に気づく体験ができる(エンパワメント)。②土と木漏れ日に囲まれたところで遊べる。③赤ん坊から高齢者までいろんな年代の人と触れ合え、群れて遊べる。④危険を知る体験ができることなどを大切にしている。

丹後：平成17年度に「ひょうご冒険教育(HAP)」を立ち上げた。HAPではエレメントと呼ばれる設備を使って冒険を安全に効果的に体験できるようになっている。例えば、「ウォール」(4mの壁)をグループ10名程度で、みんなで越えるプログラムがあり、試行錯誤をしながら壁を越える体験をすることにより、様々な気づきがある。

これまで教室で教科書を使って子どもたちを教えていたが、HAPでは「教えないで学習者の主体的な気づきや学びを待つことによる教育」があることが分かった。このHAPでの自分の体験から学んだ学びは深く他の場面でも活用できる強いものである。

子どもたちは授業以外の行事や生徒会活動・部活動などでも体験的に多くのものを学んでいるが、昨今では新しい学習指導要領の全面実施にもあるように学力重視の傾向が強くなり、体験派の教師としてはこの傾向を案じていたが、今回このような「体験の風」という

動きがあり、またそれに参加できて喜んでいる。

西森: 団体を立ち上げたきっかけをお話しさせていただく。子どもが小さい時に、こんな団体があったらいいなと思って立ち上げた。私の子どもが3歳の時、祖母に子どもを預けガールスカウトのキャンプに出かけた。大人だけのキャンプで、ものすごくリフレッシュして帰ってきた。子どもと離れて森の中で過ごせたことがリフレッシュに繋がったと思う。その体験から、お母さんのリフレッシュが大切であると感じ団体をつくらうと思った。現在やっている乳幼児向けのプログラムは、午前中は母子で過ごし、午後は母と子が別れて自然体験をするというプログラム。その後、20歳後半にネイチャーゲームと出会い、五感で遊ぶことのすばらしさを伝えることを大切に活動している。



2 子どもは体験活動でどう変わった？

伊藤: 親元を離れてのキャンプは、保護者の知らない子どもの姿や成長がみられる。また、子ども自身も新しい自分を発見することが多々ある。

農作業体験は、非日常体験であり、日常生活では気づかないことに子どもたちが気づ

き(農作業の労苦やトマトには水をやらない等)、興味・関心が高まる。

体験活動のリーダーとして関わることで、自分自身も成長した。普段気づかない自分の能力に気づくことがある。自分を見つめ直す機会にもなった。自分から発言し行動することの大切さを学んだ。プラス思考の考え方ができるようになった。

小南: 成果としてははっきりと言えることは少ないが、体験不足が原因と思われる子どもたちの心配な現象と、私なりの取り組みを報告する。

【危険の察知能力】

「今の子どもたちは、何によって危険を察知しているか？」=周りの大人たちの「あぶない！だめっ！」という声に反応している(過保護過干渉)。自分で安全を確認したり、危険を察知できる体験をさせている。例えば、擦り傷切り傷など小さなケガややけどの体験。高いところへの木登り。2mくらいの高さからの飛び降り。回転・スピード体験など。

【五感の退化】

指先の不器用さが目立っている。おもちゃは大人に作ってもらう。自分は「遊ぶ」。自分になぞったり切ったり巻いたりしておもちゃを作って遊ぶ(うさぎのヘリコプター・種のグライダー・プラトンボ・わりばし鉄砲・パチンコ)。

煙のにおいを「くさい」と言う。体験不足からにおいを表わす語彙の減少。→常に火をたいて煙を発生させ、煙のにおいや、目の痛みを体験、「けむたい」の復活。

素足体験の不足。常にクツ、靴下でガードされ、素足のすごさ、心地よさを知らない。→木の滑り台登り。クツを履いていると滑って上りにくい、素足になると、スイスイと登れる(まるで足の裏に吸盤があるみたい)。

丹後: 冒険とは未知の領域に勇気を持ってチャレンジすることで、冒険の体験は失敗し

ようと成功しようと個人を成長させる。集団で体験することで、コミュニケーションや信頼感を体験でき、他者理解や自己理解が進み、集団自体がグループからチームへと成長する。その中で個人も成長するので、冒険や体験はグループでやることに大きな意味があるのではないか。

西森:小学生向けの1日プログラムで木登りや岩登りをしたり、宿泊キャンプなどを実施している。木登りができない子も、徐々に登れるようになる。家族だけでは親心から危ない木登りなどはさせないが、子ども同士や団体での活動のなかでは、ちょっと危険をおかしながら、子どもたちは成長していく。地域や団体での子育ての大切さがよく分かる。



3 体験活動を広めるためには？

伊藤:情報化社会の中で、いかに体験活動の情報を幅広く広げていくかが課題となるのではないか。情報選択ができるということは、自分の興味関心のある限られた情報しか選択しなくなるということになる。興味があるなしにかかわらず、まずは体験活動の場があること、そういった団体があることを幅広い世代に知って頂くことが大切。知っている人

が増えると興味関心を持つ人が増える。そうすると体験活動の場が増え、体験活動を経験する人の数が増えるという、スパイラルができる。

小南:子どもたちの身近なところに冒険遊び場をたくさん作って、いつでも歩いていって遊べるといいなということ。そのために、同じ思いを持った仲間を増やしたい。特にリタイヤした団塊の世代に期待をかけている。山の管理に困っている持ち主も多いし、ちょっと手を入れるといい遊び場になりそうなどところが多くある。間に行政が入って話を進めれば、実現が早くなるのではと思っている。

「子供の現状に気づく」大人を増やすこと。子どもを取り巻く環境がますます悪化して「人類史上、これほどの子ども受難の時代はない」といわれるが、大人たちは、まだまだ目先の問題にとらわれて、子どもたちの心と体のバランスの崩れに気づいていないように思う。子どもたちが失っている『遊び』の大切さを再認識して復活する必要がある。

「冒険ひろば」が、本当に必要なのは、子育て中の大人たちではないか。冒険の森ですごく大人たちの様子を見ていると、かまどや石窯で食事を作ったり、子どもを押しつけてクラフト作りに熱中したり、民家の土間でいすに座ってボーっとしている人もいる。子育てなどの会話が弾み、木漏れ日の中で、表情が柔らかくなり、ゆったりと時間をすごしているようだ。親世代がどう生きていくか？ ゆとりの持てる価値観への変換ができるだろうか？一つのヒントが 子どもと一緒に自然の中へ……「スローダウン・シンプルな生活」ではないかなと思う。

丹後:体験はもちろん大切だが(授業による)知識の獲得も大事で、大切なはそのバランスである。原体験が知識とつながった時、体験は生きて使える経験(知恵)となることを、

野遊びの体験と木の葉の形や葉の付き方・光合成の知識との結びつきで、「あっそうか」というシナプス（つながり）が形成される。

山田先生の「体験の経験化が必要」という意見に対しては、あまりそのことにこだわりすぎると、体験の命であるおもしろさや楽しさを減じてしまう。学習者が楽しくおもしろく自主的・主体的にその活動に没入できれば、そのことだけで素晴らしい経験をしているのであって下手な振り返り等でせっかくのおもしろさや楽しさ（この気持ちが自発性やまたやりたいという動機を生む）を台無しにしないようにすれば、体験活動はもっと広がっていくのではないかと。

西森：大学生ボランティアが中心の団体だが、大学生が体験活動のプログラムを考えることができない。そのような原体験をしてきていない。幼稚園くらいの子どもを抱える親はゲーム世代。親の原体験が少なくなっている時代で、親の体験活動が必要な時代だと思う。今は父親に火おこしや木登り、岩登りなどを体験してもらうプログラムを実施している。父親が原体験をし、家族（母・子）に伝えるという意図がある。

4 まとめ

速水：思ったこと、考えたことを行動に移すことが重要だ。（パネリストの活動発表から感じたこと）体験が大切だと思っているという話はよく聞くが、実際の具体的な活動につながる第一歩を皆様に踏み出していただきたい。また、系統だった体験の積み重ねが経験になり、子どもが成長することが山田先生の講演からも伺える。そのような活動が展開できればと思う。親へのメッセージを活動団体から積極的に発していく必要がある。大人

を巻き込んだ活動をすることも大切。大人自身が、体験活動を楽しむことも大切。その大人の体験が子どもたちに波及していく。

体験活動を集団で体験する場を設けることの大切さを感じた。集団の中で他者理解ができるようになったり、相手を思いやる気持ちが育つのではないかと。得るところが大きい。

「体験したことを調べる」というようにつながっていけば、より効果的に子どもの成長を促すことができるのではないかと。

自然（じねん）の営みや驚異、楽しさ、美しさを私たちが再認識することが大切。そのことで、より自然から得るものが増える。

子どもの気持ちに共感することが大切。そのために大人がゆとりをもつことが大切。

体験の風がおこるよう、今日考え感じたことを持ち帰って実践いただき、次回には持ち寄って欲しい。

